

ブダペスト◎盛田常夫

東方への旅

さすがに3月にもなると、当地はもう春です。2月末に少し積もった雪の残滓もほぼ消え、日中の気温は10度近くにも上がり、明け方に零下を記録することはありません。緯度でみると、ここは北海道の北端に位置するのですが、私の育った北陸の冬の厳しさに比べれば、何のこともありません。他人に説明するときは、「ブダペストは雪のない札幌」ということにしています。札幌に住んだことなどないのですが、「雪のない北陸」より、花も実もあり趣もあるからです。花と実の話は追い追いにしますが。

ここ数年ヨーロッパは暖冬で、スキー場も2月末のどか雪でようやく息をついたようです。昨年夏は異常な暑さが続き、さぞかし寒い冬が来るのではと覚悟していたのですが、完全に拍子抜けでした。もっとも夏が暑かったから厳冬というのは素人考えで、そのような気象連関は存在しないようです。過去のデータでも、この組合せは確率5割以下とか。

それでも、11月末にウズベギスタン、カザフスタンを回ってモスクワに着いた時にはびっくりしました。まだ冬の入り口だというのに、そこは紛れもない厳冬でした。多分、気温そのものは零下7～8度だったのですが、「赤の広場」の吹き曝しの体感温度は確実にマイナス15度、とても立ってられず、マトリョーシカの土産物屋にかけ込みました。

毛皮の帽子がなければ、頭が冷凍されると実感したものです。

ところが、この寒いモスクワの街角に、「アイスクリーム」の売り子がいるのです。いくらモスクワっ子がアイスクリーム好きだからといって、これはない。とても売れているようには見えなかったし、他にこれといったデザート類がないからなのかと考えてしまいました。モスクワとブダペストでは自然の気候の厳しさの差以上に、日常生活や経済の厳しさが違います。

●キエフへの旅

昨年来、しばしば旧ソ連の共和国を訪れていますが、旅行の度に、混乱した様子が刻々と肌に伝わってきます。独立宣言をして間もない91年12月にウクライナを訪問したときには、ブダペストの旧ソ連大使館でビザを入手し、当地のインツォーリスト系の旅行社にホテルの手配を頼みました。ビザ料金30ドルもホテル料金120ドルもまづまづの水準といえるでしょう。キエフの国際空港は旧国内空港の一部を国際路線専用に使っただけのみすほらしいものでした。

翌92年3月にブダペストにウクライナ大使館が開設され、5月に再びキエフを訪問した時には、もう意匠変えが始まっていました。まず、同じホテルが同じ設備とサービスで120ドルから170ドルに、ビザは一律50ドルと値上がりしました。空港にはアイルランドとの合弁の免税品店

(モスクワの店も同じアイルランドとの合弁)が開店し、空港でもビザの取得が可能になりました。それと同時に、出国係官がビザ切れのお客を相手に小銭を儲けることも始めました。期限切れを見逃すから20ドルないか、と。小銭といっても、彼らの1ヶ月分の給料になる。さすがに経験を積んだモスクワ空港では、ちょっとばかり管理が厳しくなっていて、入出国管理のボックスは板張りから完全ガラス張りになり、そこには「係官の金品要求には応えないように」という張り紙がしてありました。動物園に来たみたいで笑ってしまいましたが、それでも若い係官が「たばこを持っていないか」と平気で聞く度胸には参りました。何となく哀れを感じさせます。

1ヶ月後の6月に再びキエフを訪問した折、同じインツォーリスト・ホテルは最初の1泊に25ドルの予約料を取る仕組みに変わっていました。スポットで行っても予約料を取るのですから、「予約料」というのはおかしいですが、とにかく外貨が欲しいということだけはわかります。もう一つは、恐い話ですが、キエフからオデッサに向かう飛行機に定員以上のお客を詰め込んでいることです。もともと機体の整備も不完全な汚いプロペラ機なのですが、パイロット、スチュワーデスが一体になって副業をおこなっているのだから、かないません。もちろん、余分の座席があ

るわけではなく、貨物室が「もぐり」のお客の定席になるという次第です。こういう飛行機には荷物の安全はもちろん、墜落しても事後処理など期待してはいけません。毎日の生活のために、これくらいの規則違反は何でもなくなっています。10月の2度目のオデッサ行きでは、「もぐり」のお客を乗せる乗せないで、スチュワーデスがパイロット、スチュワードと激しく口論し、そのおかげで出発が1時間遅れてしまいました。急がないなら、キエフオデッサは寝台車を使うべきでしょう。よほど快適で安全です。

●パウチャーにご用心

CIS といっても、それぞれの入国管理・税関のシステムは整備されていません。ビザの取得方法もきちんと決まっています。一般に、ウクライナ以外はロシアのビザで間に合うと考えて間違いありませんが、ウズベギスタン入国には別途空港でのビザの取得が必要とされています。ただ、これもいい加減で、飛行機を降り、一般客と同じバスで出口に出してしまえば、何も要求されません。出国でもロシアのビザがあれば、とくに問題になることもありません。

入国管理がルーズな割に、外貨収入にたいする規制だけはかなり厳格です。変な話ですが、ロシア、ウクライナへの旅行は別として、ブダペストからは旧ソ連国内、つまり CIS 諸国へのフライトの予約はできますが、チケットは買えません。チケットの代わりに、パウチャーを買い、これを各旅行先で航空券に替えなければなりません。それも簡単ではないのです。これは旧ソ連の独占旅行社インツォリストと航空会社アエロフロートの資産分割問題に起因しているようです。CIS の構成共和国は

それぞれの国内のインツォリストとアエロフロートの資産を自国の所有に転化する代わりに、国外資産の所有権をロシアが取得することで妥協しました（ただし、ウクライナは完全に承知していませんが）。ここから旅行者にとって面倒な問題が発生しています。本当のところはよく分かりませんが。

旧ソ連内の旅行では、外国人が国外でインツォリストあるいはアエロフロートにお金を払えば、その外貨はロシア側の口座に入ることになります。もちろん、ロシア側から各共和国への振替がなされれば、各国間の決済は問題ないのですが、会社の分割・独立で決済システムが作られていないようなのです。ロシアのパウチャーをもらっても、外貨収入になる見通しがないということで、パウチャー受取拒否という問題が起きるのです。実際、ウズベギスタンでは国外で発行されたアエロフロートのパウチャーは受け取れないという法令ができましたから、ここではいくら議論しても交渉しても始まりません。さっさとキャッシュでチケットを買い、後でパウチャーを発行元で買い戻してもらうのが利口です。

ロシア国内ですら、パウチャーをチケットに代えるのは簡単ではありません。シェレメテヴォ国際空港から100キロは離れているドモジエヴォ空港が中央アジア行きの国際線（今までは国内線）空港になるのですが、発券窓口、カウンター、スーパーヴァイザーの3箇所を何度も回って、最終的にチケットに代えるまで1時間を要しました。スーパーヴァイザーは OK だというのに、発券窓口はこんなものは受け取れないという。カウンターを挟んで、何度も往復した結果がまる1時間。ブダ

ペストを出発して12時間、深夜1時のタシケント行き出発前のゴタゴタがこれだからたまりません。

●歴史のノスタルジーに惹かれて

そうまでしてアエロフロートにこだわる理由はあるのでしょうか。しかし、こんな経験でもしないと、ソ連邦の崩壊で実際に何が起こっているのか肌では分からないでしょう。それに、とにかく安い。ブダペストーモスクワータシケントーアルマ・アターモスクワブダペストで750ドル、ただし安全の保証はありません。ちなみに、ルフトハンザはフランクフルトから週1便、アルマ・アタ行きを飛ばしていますし、イスタンブールからもトルコ航空が同所に飛ばしています。でも、これを使うと料金が5倍に跳ね上がります。

最近の若い人はなかなか勇敢で、ブダペストの旅行社でこの旅程の予約をしていたら、隣の若い日本人女性旅行者がブダペストからモスクワ経由北京行きの列車の予約をしていました。2等で150ドル、1等で300ドル位です。本当に北京に着くのでしょうか。やってみなければ分からないでしょう。

西方への旅を好むハンガリーの友人たちは、何の因果があって東方へ旅するのだと聞きます。15年前のハンガリー、30年前の貧しかった頃の日本の生活が見えるからと答えることにしています。ソ連邦という傘のなかでこれまで隠されていた多くの国・民族の歴史が、急に見えるようになったこともあります。そういう歴史のノスタルジーに惹かれるというのは嘘に聞こえるでしょうか。

[1993年3月10日 ブダペスト]

(もりた・つねお/野村総合研究所研究顧問・ブダペスト経済大学客員教授)